

<その他：書評 (Book Review) >

五木寛之著 「親鸞」

小手川 巧光*

1. 概要

日本を代表する小説家の一人である五木寛之氏 [1] が久しぶりに出す本格的長編歴史小説である。2008年9月1日より東京新聞をはじめ全国27紙に掲載され始め、去る2009年8月31日までの一年間連載が続いた。書籍としては、2009年12月末に講談社から上・下2巻に分けて発刊される予定である（この紀要が出る頃には既刊のほうである）。連載された27紙はいずれも地方新聞であるが、全国の代表的な地方紙が名を連ね、結果的に朝日新聞や読売新聞のような全国紙に単独掲載されるよりも多い1200万部に掲載されることとなった。ちなみに評者は、西日本新聞に掲載されたものを、本学（保健医療経営大学）の図書館で主に連載最終月の8月にまとめて読ませていただいた。著者の五木寛之氏は、1980年に「青春の門－再起篇」を出した後、執筆活動を一時休止し、京都の龍谷大学で仏教史を学んだ後、浄土真宗に深く帰依したことで知られている。その五木氏が帰依後20余年の構想を経て書き上げたのがこの小説「親鸞」である。全国の五木ファンのみならず、日本の総人口の約20%を占めるとも言われる浄土真宗門徒、さらには「疑と迷の闇のまっただなかには滑りこんでいこうとしている時代」[2]の老若男女を読者に巻き込んで、連載中も連載終了後も反響が止むことのない話題作となった。この小説を原作にした映画やテレビドラマが計画され、便乗した各種イベントが各地で催されているのは当然の成り行きといえる。

しかし、宗教文学を専門にしている評者としては、ただそのような一般読者の感想ばかりを基にして書評を書くわけにはいかない。浄土真宗という日本の精神文化に多大なる影響を与えた宗教の始祖親鸞 [3]の人生を描きながら、宗教や信仰の本質にいかにか深く切り込めているのかも評価の対象としたい。その点に関して、五木氏ほど難しいことを易しく分かりやすく表現できる作家はいないと言わざるを得ない。すでに「他力」(1998)や

「私訳－歎異抄」(2007)などでその能力を高く評価されていたのだが、今回は物語の中に違和感なく仏教の教理を挿入することに成功し、難しい教えがさらに咀嚼しやすくなっているのである。そのあたりのことも後述したい。

2. 一般的な評価

著者の五木氏は連載に先立って、何種類かのコメントを各紙に寄せている。そのうちの短いものをここに引用しよう。

「ひさびさの新聞連載なので、不安もあればプレッシャーもある。しかも主人公は親鸞だ。時代は激動の中世である。作者としては武者ぶるいを禁じえない。とことん判（わか）りやすく、明日がまちどおしいような面白い作品を書こうと思う。できればそこに、いくばくかの深さも欲しいと願うのだが、それは傲慢（ごうまん）というものだろうか。」

というコメントだが、「とことん判（わか）りやすく」という点に関しては、先述したとおりさすが五木寛之氏だと言いたい。神戸新聞の調べでは、読者の70%以上が毎日読んでいたというデータもあり、年齢・性別、さらには教育レベルの違いさえ越えて幅広く読まれていたことが想像できる。このデータはまた、「明日がまちどおしいような面白い作品を書こう」という目標も見事に達成できていたことを証明している。何を隠そう評者自信も、最初こそは専門の絡みでどちらかという職業的な動機から読み始めたのだが、日ごとに読むペースが速くなり、最後には一日に2か月分（62日分）を一気に読んだものである。新聞を一つ一つ取り替えながら、小説の掲載ページをいちいち捜しながらの作業を全くと

* 保健医療経営大学保健医療経営学部 助教, 修士 (経済学)

E-mail : yos-kotegawa@healthcare-m.ac.jp

わしく思わずに読破できたのは、とりもなおさずその面白さ以外のなにもでもない。学生時代に「青春の門」の当時既刊分全部（第1部1971～第6部1980）をわずか1週間で読んだときのワクワクドキドキ感が鮮やかに蘇った。

先述のとおりこの小説はまだ書籍化されていないので、専門家による本格的な書評は見当たらないが、ホームページやブログなどネット上では盛んに取りざたされている。大半は連載を歓迎し内容を積極的に評価するものであるが、中には批判的なものも見られる。目立つのは、親鸞の人生や活動で最も重要な部分が描かれていないというものだ。親鸞は90年の人生を全うしたと言われているが、小説ではそのうちの一部の年月を描いている。両親を亡くし叔父の家に身を寄せていた幼少時代から越後に流罪になるまでの約20年間である。批判では、その20年間よりもむしろ後の越後や関東で過ごした時代こそ親鸞が波乱万丈の人生を歩みつつ宗教家として円熟し大成した時代であり、そこに触れずして親鸞を描いたことにはならないというのである。そのような批評をする人達は、おそらく、仏教関係者や指導的立場にある人が多いのではないと思われるが、そもそも、これは小説であり、どこをどのように描こうが著者の自由であるということ、そして、どのように大成した人物であろうとも、多感な幼少年期から青年期に受けた経験がその後の人生に大きく影響していることを考えれば、そのような批判は正当性を欠いていると言わざるを得ない。実際、この時代に、親鸞をして「たとえ地獄に行かなければならないとしても信じ通す」[4]とまで言わしめた法然上人と出会い、生涯の伴侶となる恵信尼と出会っているのである。この二人との出会いを中心にストーリーは展開するのであるが、一つの完結した小説として十分読み応えのあるものとなっている。さらに、五木氏本人に尋ねてもまだ分からないことかもしれないが、続編が出される可能性も十分ある。むしろ、そのような期待を大いに抱かせる終わり方になっていることも事実である。

3. 流れの中に違和感なく織り込まれた深み

五木氏は執筆に先立って、判り易さや面白さに加え「いくばくかの深さも欲しいと願う」と述べている。その野心的企てがいかに発揮されているのが、主に3月に連載された「選択（せんちゃく）ということ」という章である。そこからの幾箇所かを引用したい。

「わたしは物心つく前に親と別れた孤児のようなものであった。さびしかった。心細かった。つらかった。だが、私はついに出会ったのじゃ。まことの母のような仏さまに。それが阿弥陀仏じゃ。

多くの世の母親の中から、ただ一人の自分の母と出会う幸せを、選択（せんちゃく）、という。そしてこの世の哀れな者を一人残らず救うぞ、という阿弥陀仏の誓いを、本願という。そのみ仏の本願を信じて、思わず体の奥からもれ出る声、それが念仏というもの。声に出さねば人には届かぬ。ましてみ仏には。…」

これは、法然上人が仏教の重要な教義の一つである選択（せんちゃく）という概念について語っている場面であるが、同時に本願や念仏についての判り易い説明にもなっている。これに対して親鸞には次のように述べさせている。

「…選択（せんちゃく）とは、多くのものの中から一つを選びとることだ。いや、それだけではない。選択とは、みずからが選びとったということだけではなく、むこうから選びとられた、という事実も大事ではないのか。念仏をするときに、手を合わせる。おのずとそういうかたちになる。そのとき『右の掌に左手を添えたのか、それとも左の掌に右手を寄せたのか』と、議論するのはむなし。横川（よかわ）でも学生（がくしょう）たちが夜を徹して議論しているのを盗み聞いたことがあった。…そこで議論されているのは、両手をぼんと叩いて、『さて、右手が鳴ったのか、それとも左手が音を発したのか』と、というような議論だったことをおぼえている。法然のいう、選択、とは、そういうことではない。救われたい、という願いと、救いたい、という願いが触れ合って火花が散る。そこに生まれた光が闇を照らすのだ。…」

と、法然の説明を補足するような形で述べているが、「選択とは、みずからが選びとったということだけではなく、むこうから選びとられた、という事実も大事ではないのか。」という部分は、新約聖書に記されたイエス・キリストや使徒パウロの次のような言葉を彷彿とさせる。

「あなたがたがわたしを選んだわけではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」（新改訳聖書ヨハネの福音書15章16節）

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です」（新改訳聖書エペソ

人への手紙2章8節)

これは、キリスト教の教えのうち最も中心的なものの一つとも言える信仰義認の教理に関する部分であるが、法然や親鸞の言葉の中にも日本人の心に届くもう一つの信仰義認の説明がなされていると感じるのは評者だけであろうか。次のような恵信尼の言葉も心憎いばかりである。

「…ただ念仏して浄土に往生するというお話には、深く心を打たれて、そのつもりで念仏していたのです。でも、いま思えば、それは自力で勤める念仏だったのではないのでしょうか。のちに越後へもどり、死を覚悟したとき、気づかぬままに、ふっと念仏が口からこぼれ出てきたのでございます。そのとき、はっきりと心が定まりました。これまでの紫野は死んだのだと。そして不思議に病が快方に向かい、元気を取り戻したとき、わたくしは生まれ変わったような心持でございました。信心に目覚めたというのではなく、信心を恵まれたのだと感じたのです。そこで新しく生まれ変わった自分に、恵んでいただいた信心を生涯忘れまいと(恵信と名乗ることにしたのです) …」

恵信尼が、自らの名前を「紫野」から「恵信」に変えたときのいきさつを述べている場面であるが、ここにもまた、仏教で言うところの「他力本願」、キリスト教で言うところの「聖定」の教理が、(専門家に言わせれば不十分かもしれないが)この上なくわかりやすく表現されていると思うのである。

このように親鸞や法然の言葉をキリスト教の教理と結びつけるには、慎重さを要することは言うまでも無いことである。しかし、当の五木氏本人がカトリック司祭との対談集「神の発見」[5]という本の序章で述べていることが実に興味深い。すなわち、

「私は自分で勝手にブッティストだと思っている。ブツダと一般に呼ばれる釈迦に深く共感し、その思想と生き方に帰依してきた。しかし奇妙なことに、いつも読んで感動するのは聖書である。親鸞の言行を記録した『歎異抄』を読んでも、ああ、このくだりは聖書のなかのあの部分と重なるな、と感じたりするのだから困ったものだ。」

と述べているのだが、この思いは小説「親鸞」を読みつつ評者が体験した思いと全く同じである。情欲やプライドについて書かれた部分、一念義と造悪説、そして悪人正機説について説明されている部分、さらには愛や赦し

が感動的に表現されている部分など挙げればきりが無いが、それらの部分がいちいち聖書の記述と結びつくのである。もともと禅宗などとの比較で、キリスト教との類似性を指摘されてきた浄土真宗であったが、そのことがこうも見事に違和感なく流れるように挿入されているのだからたまらない。また、親鸞の少年期を描いた「放埒人の血」という章がある。このタイトルからも想起されることだが、後に法然上人と出会い深く交わるようになって、本当の父親によりやく出会えたという親鸞の気持ちを五木氏は描いており、物語り全体を通してキリストによる有名なたとえ話「放蕩息子の帰還」[6]と同じ流れを感じずにはいられないのである。このような観点からの読書を可能にしていることを考慮に入れば「いくばくかの深さも欲しいと願う」という五木氏の言葉は「傲慢」どころかあまりにも謙遜な表現だと思わずにはいられない。

4. 五木寛之=宗教間対話の達人 — おわりにかえて

書物は何を読むにしても著者がどのような立場で書いたのかを知るのは大切である。特に宗教的な書物についてはそうである。批判的な態度で書かれているのか、特定の宗教のプロパガンダなのか、あるいはそのどちらでもないが、無神論的な態度で書かれているのか、純粋に学術的な態度で書かれているのか…等々である。何度も述べたとおり五木氏は仏教徒であり、浄土真宗に帰依した人物であるからして、この小説はある意味でそのプロパガンダの性質を持っていると言えなくもない。しかし、これは小説家の性とも言える部分であろうが、彼らがひとたび筆を取り物語を書き始めれば、我々素人には測り知れないほどの集中力と純粋さをもって、世俗的な目的など忘れ去り、登場人物のえぐられた内面が赤裸々に読者の心に届けられるべく、全てのエネルギーが注がれるのである。五木氏も今回の執筆に当たっては、書棚を一掃し、親鸞だけの文献を集めた「親鸞」棚を設置し、その結果整理した書物はダンボール10箱にもなったほどで、文字通り寝食を忘れるほど傾倒してこの本を書いたと言われている。キリスト教の教理が多く盛り込まれているように見える、三浦綾子氏[7]や遠藤周作氏[8]の小説も、実は結果的にそのように思えるのであって、執筆者本人はそのようなつもりで書いたのではなく、いつの間にか本人の中に息づく信仰が自然と作品のなかに滲み出ているというのが真実ではなからうか。C.S.ルイス[9]のナルニア国物語[10]もそうである。あれほどまでに鮮明に聖書的な枠組みが背景に読み取れることからして、キリスト教の寓意物語だと取られがちであるが、実はルイス本人が主張したように、その意図は全くなく、ただ子供たちを喜ばせたいと願う一心で書かれた結果と

して、彼の信条・信仰が不可避的に注ぎ込まれているのである。小説「親鸞」も、釈迦や親鸞に帰依し自らの内面深くにその教えを潜め持つ著者が寝食を忘れるほどまでに傾倒して書いた本である。仏教や浄土真宗の精神が否応なく反映されるはずである。仏教国日本に住む我々が、信仰する宗派を超えて、自らを理解するために読む価値は十分にあると言えよう。

よく、真の国際化のためには、まず自国について深く知り理解することが必要だと言われる。同じことが宗教間対話についても言えることが五木氏の著作活動を通して感じられることも事実である。つまり、他宗教を理解し他宗教と交流を持つためには、まず自らの宗教を理解しその信仰の上に安らぐことが求められるのではないだろうか。たいていの宗教には他の宗教を許さない排他的な勢力が存在している。また、いかにも釈迦やキリストやマホメットといった宗教偉人たちを全て理解したかのごとく語り、その上で新しい宗教の必要性を説く勢力の出現が後を絶たない。しかし、いずれの勢力も、あえて厳しく言わせてもらえば、「根無し草」との批判を免れない。仏教にしろキリスト教にしろ深めれば、そう易々と批判できるものではないし、また、他を批判することによって自らの価値を見出さざるを得ないような安っぽいものでもないのである。先に挙げた、三浦綾子氏や遠藤周作氏、あるいはC.S. ルイスや五木寛之氏に共通しているのは、それぞれ自らの宗教を持ち信仰を深め、その信仰をこよなく大切にしたい人達である。その彼らが、全くと言っていいほど他宗教批判を展開していないのである。それどころか五木氏に至っては、他宗教の指導者たちと積極的に交流することでさらに自らの信仰を深めているようにさえ見える。外国語を学ぶメリットの一つに、母国語への理解を深められるという点があるが、他宗教への理解も同じように自宗教への信仰を深める効果があるのではないだろうか。なにかそのあたりに非常に難しいと言われている宗教間対話の秘訣が見え隠れしているように思えてならないのである。

(注)

- [1] 1932年福岡県八女市生まれ。1966年「さらばモスクワ愚連隊」で小説現代新人賞を受賞して以来、主に小説家・エッセイストとして活躍し、今日までに直木賞（1967）、吉川英治文学賞（1976）、仏教伝道文化賞（2004）など数々の賞を受賞し、様々な賞の選考委員を務めている。
- [2] 連載を前にして山口新聞などに寄せられた「俗から聖への長い旅」と題する五木氏本人のコメントから抜粋
- [3] 親鸞（1173 - 1263）の生涯は、伝記が存在しない

ことからなぞに包まれた部分も多いが、妻恵信尼から末娘覚信尼へあてた手紙10通が1921年に見つかり、その実在性やある程度の人物像が明らかになった。名前は、幼児期の松若丸→少年期の範宴（はんねん）→法然門下生初期の綽空（しゃくくう）→後期の善信（ぜんしん）と変わり、その後はこの善信と親鸞の両名を併用したようである。

- [4] 歎異抄からの一節
- [5] カトリック司祭森一弘氏を対話者として2005年に出された宗教間対話の意欲的な作である。
- [6] 新約聖書ルカの福音書第15章に記されたイエス・キリストによる例え話。数ある例え話の中でも最も説教や信仰書への引用頻度の高いものの一つである。
- [7] 三浦綾子（1922 - 1999）は北海道旭川市出身の女流作家。1963年に「氷点」が朝日新聞に連載されて以来本格的な作家活動を始める。「氷点」をはじめ「塩狩峠」などベストセラーも数多く、生涯にわたってキリスト教の原罪をテーマにした作品を描き続けた。北海道旭川市に三浦綾子記念文学館。
- [8] 遠藤周作（1923 - 1996）は東京都出身の小説家、劇作家。「沈黙」をはじめキリスト教をテーマにした多くの作品を残している。長崎市に遠藤周作文学館。
- [9] C.S. ルイス（1898 - 1963）はアイルランド生まれのイギリス人で、近世のイギリス文芸批評を専門にしながら、キリスト教護教論を展開し、ファンタジー系の物語も残すなど多彩な作家活動を行った。最晩年にはケンブリッジ大学の教授として迎えられている。
- [10] ナルニア国物語（1950 - 1956）はC.S. ルイス作の子供向けファンタジー小説（全7巻）。世界中で41言語1億2千万部発行されている大ベストセラーである。日本語へは1966年に岩波書店より瀬田貞二訳で出版され、今日まで版を重ね続けている。2005年に第1巻「ライオンと魔女」、2008年には第2巻「カスピアン王子の角笛」が実写版映画として公開された。

(参考文献)

- 五木寛之「蓮如物語」1955, 角川書店
- 五木寛之「他力」1998, 講談社
- 親鸞著、五木寛之訳「私訳 歎異抄」2007, 東京書籍
- Itsuki, Hiroyuki *TARIKI Embracing Despair, Discovering Peace* 2000, 講談社
- 五木寛之「神の発見」2005, 平凡社
- Wangerin, Walter *JESUS* 2005, Cornwall, MPG Books

Nouwen, Henry J.M. *The Return of the Prodigal Son* 1992, New York, Bantam Doubleday Dell Publishing Group, Inc.

三浦綾子「氷点」1965, 角川書店

三浦綾子「塩狩峠」1968, 新潮社

遠藤周作「沈黙」1966, 新潮社

Lewis, Clive Staples *The Chronicles of Narnia* 1950-1956, New York, Harper Collins Publishers

※本文にも記したとおり、書評執筆にあたって多くのホームページやブログを参照した。

ここにすべてを紹介することはできないが、その一部のURLを以下に記すこととする。

・「五木寛之著・小説『親鸞』のご紹介」このページでは主にデータを参照した。

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~bookhal/sinnrann2.htm>

・「化石の戯言」このページでは主に批評を参考にした。

<http://monvil.mediakat-blog.jp/e30190.html>

・「五木寛之で自分をほめる」このページでは主に批評を参考にした。

http://blog.livedoor.jp/itsuki_hiroyuki/

